

筑波大学構内の案内表示の分布

甲斐 宗一郎（地球科学専攻）

- 1. 目的:**筑波大学は外周約 10km の九州大学に次ぐ日本で2番目のキャンパスの広さを誇る。複数地区に分かれており、この中に多種多様な学科の研究施設が立ち並ぶという構造となっている。こういった条件のためか初めてやってきた外部からの人間が迷ってしまうという事例もよく聞かれる。そのため本研究では学園マップや建物の方向を示す案内表示の数や分布を調べ、不足している場所について考える。
- 2. 対象地域:**研究対象は多くの分野が立地していること、面積が広いことといった理由からより迷いやすい地区と思われる中地区とする。北端を県道 200 号線、南端を平塚通り、東は学園東通り、西は水路で囲まれた範囲を対象地域とする。
- 3. 研究手法:**ArcGIS と ArcGISOnline そして携帯端末アプリ Collector を用いて行った。対象地域内をくまなく探索し、5種の看板の位置と「建物方向表示」が示す建物を記録した。
- 4. 結果・考察:**結果は第1図のようになった。まずマップ看板は大学全体マップ2枚、マップ(大)11 枚、マップ(小)は8枚発見された。全体マップはどちらも東大通りから学内に入る際に通る位置、マップ(大)は大学循環バスのバス停とエリア全体の中心部、マップ(小)は第一～三エリアの入り口となる場所に配置されていることがわかる。ただし、中央エリア北部や図書館西部の駐車場とその周辺にはいずれのマップも設置されていない。車で来てそこから徒歩で目的地を探すという者が迷う原因の一つとなっていると思われる。建物案内表示と建物方向表示は 62 枚と 178 枚発見された。建物方向表示看板が示すターゲットとの関係を第2図に、建物方向表示が指示している建物の中で 5 枚以上あったものと 1 枚しかなかったものを第1表に示す。2A～H棟の第二エリアを示すものが特に多く、次いで第三エリア、第一エリアと範囲を示すものが続く。その後は学系棟や本部棟、図書館と目印になりうるものが多い。少ないものでは単一の建物や、別エリアレベルで離れた位置にある場所を示すものが多い。また、エリア中心部の看板ほどターゲットとの距離が近いものが多くなっている。外側では遠いエリアを示すものが多いが中央の、たとえば松美上池そばの看板では 100m に満たない距離の建物を示している。



第1図 筑波大学中央エリアの看板の分布

(背景地図に大学 HP 公開のものを使用)



第2図 建物方向表示看板とターゲット

(背景地図に大学 HP 公開のものを使用)

第1表 建物方向表示の内訳

2A～H棟	20	苗畑作業棟	1
3A～K棟	15	生物・農林学系G棟	1
1A～H棟	11	遺伝子実験センター	1
生物・農林学系棟	10	生物・農林R研究棟	1
大学本部棟	9	環境防災研究棟	1
工学系学系棟	9	SC棟	1
中央図書館	8	4A～D棟	1
研究基盤総合センター	8	付属病院	1
人文社会学系棟	7	西大通り	1
一の矢学生宿舎	6	第一エリア	1
文科系修士棟	6	共同研究棟	1
人間系学系棟	6	スチューデントプラザ	1
自然系学系棟	6		
理科系棟	5		
バス停留所(土浦方面)	5		